

## 前 号 目 次

### 研究報告

#### 「能率」の共同体

—第一次大戦後から高度成長期までの

ミドルクラスとナショナリズム— …………… 新 倉 貴 仁 …… 5

### 講演会〈成城学園創立100周年・経済研究所創設30周年記念〉…………… 31

#### 「文明と経済—古代・中世の社会経済構造」

中世ローマ帝国の社会経済システム

—再分配国家と市場の役割— …………… 大 月 康 弘 …… 33

#### 「前近代経済における貨幣、信用、国家：

古代メソポタミアから中世ヨーロッパまで」…………… 明 石 茂 生 …… 53

対 談 …………… 87

### シンポジウム〈成城学園創立100周年・経済研究所創設30周年記念〉…………… 101

#### 「2050年の世界に向けて日本は何をすべきか」

パネル主旨 …………… 102

問題提起 …………… 岩 田 一 政 …… 103

地域別人口動向から見た今後の日本のあり方 …………… 岡 田 豊 …… 113

#### IoT でつながる世界経済、日本企業

～業種を超えた競争・協調の時代へ～ …………… 山 本 謙 三 …… 128

財政と金融の中長期課題と戦略 …………… 岩 本 康 志 …… 142

討 論 …………… 156

### 編 集 後 記

おかげさまで年報32号を発行することができた。これもひとえにお忙しい中ご講演をお引き受けくださり、また本号にご寄稿くださった先生方—吉川洋氏（東京大学名誉教授・立正大学経済学部教授）、田近栄治氏（一橋大学名誉教授・成城大学経済学部特任教授）、中馬宏之氏（成城大学社会イノベーション学部教授）、久世和資氏（日本アイ・ビー・エム株式会社執行役員最高技術責任者）—、さらに講演会にご参加頂いた研究者の方々および多数の市民の方々の暖かいご支援の賜物と、研究所を代表して心よりお礼申し上げます。

さて、6月16日と10月13日のご講演の有益で魅力的な内容に関しては本号掲載論文をお読み頂くこととして、ここでは講演会およびミニ・シンポジウムの趨勢について若干気づいたことを書き留めておきたい。

ミニ・シンポジウムというのは、研究所の3つのプロジェクトがそれぞれのプロジェクト・テーマに沿った講師を招いて、研究所の閲覧室で10数名程の比較的少数の参加者で行なわれており、昨年度は過去最多の年9回の開催となった（なお本号掲載の後藤康雄氏の論文は7月11日開催のミニ・シンポジウムでのご報告内容を元にまとめて頂いたものである）。講演会に多数の市民の方がご参加されるようになってきていることはすでに記したが、最近、このシンポジウムにも常時2、3名の市民の方のご参加を頂いている。一つにはネット配信などを通じて多くの方々に講演会だけではなくミニ・シンポジウムの開催日やテーマなどを知って頂く機会が増えたことがあるのは言うまでもないが、同時に知的好奇心の社会的な高まりがあるように思われる。講演会およびミニ・シンポジウムで、専門家の視点からの質問だけではなく、市民の方から、その専門知が日常生活とどのように切り結ぶのかという専門家の視点からは見落としがちな質問が多くなされるようになり、私たちも大きな刺激を受けている。これからも研究所がいつそ社会に開かれ、様々な視点から互いに刺激を与え与えられる場になるように努めていきたいと改めて決意したことを記して編集後記としたい。